

9月4日（木）

## ベリー区議会表敬訪問

9月4日午前9時30分、グレーター・マンチェスター合同行政機構を構成する自治体の一つであるベリー区議会との交流を図るため、ベリー区庁舎を訪問した。庁舎玄関に出迎えていただいたイーモン・オブライエン議長(Leader Eamonn O' Brien)から区庁舎、区議会議場等について以下の説明を受けた。



オブライエン議長、マリア国際部長と

・エリザベス女王が1953年に戴冠された翌年の1954年にベリー区庁舎は建設された。



ベリー区庁舎

- ・ベリー区議会の議員数は51人、任期は4年である。選挙は4年に一度行われるのではなく、3分の1ずつ改選される。現在、労働党が多数党である。



ベリー区議会議場

- ・オブライエン議長は2020年から議長を務めている。議長の任期の定めはないが、実際には4年程度で交代している。



歴代議長の掲示

- ・1974年以前はランカシャーの一部であったが、1974年にグレーター・マンチェスターになってからベリー区議会になった。ランカシャーからグレーター・マンチェスター合同行政機構に移行したときに、新しい体制を表すものとして紋章を作った。紋章の名称は「FORWARD IN UNITY (みんなで一つになって前進しよう)」と名付けられている。議場にもこの紋章が掲げられている。



ベリー区の紋章「FORWARD IN UNITY」

- ・議場内には「名誉自由市民」（大変重要なことを成し遂げた人）の名前が掲示されている。有名な音楽グループ「ELBOW (エルボー)」や、映画監督で、ロンドンオリンピック開会式の式典演出を行ったダニー・ボイル氏 (Danny Boyle) の名も刻まれている。



名誉自由市民の掲示

### 【杉村の挨拶の概要】

Nice to meet you. My name is Kotaro Sugimura. And I'm the President of the Osaka city council.

イーモン・オブライエン区議会議長にお会いすることを大変楽しみにしていた。心温まる歓迎に心から感謝申し上げます。

大阪は、かつて「東洋のマンチェスター」と呼ばれていた。それは、18世紀から19世紀にかけて行われた産業革命がマンチェスターで発祥し、世界の産業をリードしたが、アジアにおいては、我が大阪がマンチェスターの成功にならって急速に産業を発展させたことに由来する。

古くから大阪とグレーター・マンチェスターには共通点が多いが、近年は様々な分野での交流が深化しており、大阪市にとってグレーター・マンチェスターは最も重要なパートナーの一つとなった。明日には、姉妹都市提携が調印され、ますます幅広い分野で両都市の交流が深まることと思う。

また、大阪では10月13日まで「大阪・関西万博」が開催されている。ぜひ何度でも大阪へお越しいただき、活力あふれるその姿と大阪の「おもてなし」を感じていただきたいと思う。大阪で再びお会いできることを楽しみにしている。

最後になったが、オブライエン議長に深く感謝申し上げるとともに、ベリー区議会のますますのご発展と大阪市とグレーター・マンチェスター合同行政機構の繁栄を祈念して私の挨拶とする。

### 【イーモン・オブライエン議長挨拶の概要】

ベリー区議会にお越しいただき感謝する。

グレーター・マンチェスター合同行政機構の一員として、我々は常に海外の方々と関係の構築を精力的に行っている。大阪市とグレーター・マンチェスターの関係は、横山市長にとってもアンディ・バーナム市長にとっても重要であるが、グレーター・マンチェスター合同行政機構を構成する全てのメンバーにとって重要である。残念ながら、私は個人的にはまだ大阪を訪れたことがないが、素晴らしいところだというお話はよく聞いている。大阪に行ったことがある私の友人に大阪から代表団が来るんだと話しをしたら、彼は大阪について2時間話し続けた。本当に素晴らしいと言っていた。私も必ず行きたいと思っている。これからさらに大阪の方々と対話を重ねて関係を深めていきたいと考えている。

今回のご訪問の行程がスムーズにいくように、実り多きご訪問になるようにお祈りする。



意見交換の様子

### 【意見交換の概要】

○オブライエン議長 議長室に掲示されている地図を見ていただくと、プレストウィッチのセントメアリーズが私の選挙区である。マンチェスターに最も近いところである。ラムズボトムはベリー区の最も北にあり、この辺りはかなり田舎である。こうした地域も含めてみんな一体となってまとまっている。

都会は労働党が強い。イングランド北部は労働党が強いが、南部では保守党が強い。ベリー区は過半数を占める党がない。グレーター・マンチェスターの10区のうち3区では過半数を占める党がない。グレーター・マンチェスターを構成する10区のうち1区だけ労働党でない議長がいる。しかし、どの区も激しく対立することなく運営されている。

ベリーにはベリーフットボールクラブというサッカーチームがある。イングランドで最古のチームの一つである。チームの維持が困難な時期があり、かなり苦労して何とか維持してきた。コミュニティにとってサッカーチームは非常に重要である。英国にとってサッカーは重要であるが、地域にとってサッカーはもっと重要である。

お手元にあるマンチェスタータルトは、このあたりの伝統的なデザートである。カスタードクリームとココナッツが入っている。ベリーには「market (市場)」があり、伝統的な食品や精肉、生鮮食料品などが手に入る。イギリスじゅうから品物が集まる。

○杉村 なぜベリーに品物が集まるのか。それは地理的な理由によるものか。

○オブライエン議長 ベリーは昔からずっと交易、商業の中心であった。市場の周り

に人が住み、町ができた。そしてマンチェスターに近いこと。ローマ時代にまでさかのぼると、「ローマ人がつくった道」と言われる、ベリーとマンチェスターをつなぐ真っ直ぐな道があった。イギリス各地に「ローマ人がつくった道」があるが、それはどれも広い真っ直ぐな道である。トラム（ライトレールウェイ、路面電車）はベリーとマンチェスター間で最初に開通した。そういう歴史があつて、市場には途絶えることなく人が来るのでずっとベリーは栄えてきた。我々は歴史の幸運に恵まれた。

大阪市からは何人がこちらに来ているのか？

○杉村 大阪市代表团は15人程度で、大阪市会代表团は私と事務局長の二人である。

○マリア・ゴンザレスグレーター・マンチェスター合同行政機構国際部長 そのほか、ビジネス代表团やダンスチームのOSKもこちらに来ている。横山市長は、今朝はビジネスセミナーに参加している。

明日の午後はシティセンターで姉妹都市提携の調印式が行われる。オブライエン議長にもお越しいただくことになっている。水曜日（3日）から来週の火曜日（9日）にかけてはジャパンウィークが開催される。

グレーター・マンチェスターはアメリカのオースティンとフレンドシップ提携を締結しているが、姉妹都市提携を締結するのは初めてである。

○杉村 今回のグレーター・マンチェスター合同行政機構と大阪市との姉妹都市提携締結について、ベリー区の人々はどう受け止めているのか。

○オブライエン議長 大変重要なものだと考えている。イギリスでは地方分権はあまり進んでいない。中央政府が権限を握っている。地方政府として我々のアイデンティティ、存在感をもっと高めていきたいと思っている。だから、姉妹都市提携を締結することは、グレーター・マンチェスターのアイデンティティを高める機会になる。

○杉村 もう一つお聞きしたい。イギリスの議会制度には歴史がある。こちらにお伺いするまでにマリア国際部長にいろいろとお話を聞いて、こちらの議会制度は進んでいると感じている。

我々は、大阪で「大都市制度」の在り方について大変な議論を行ってきた。グレーター・マンチェスターの「合同行政機構」という行政の形は大都市制度の一つであると考えられる。大阪市では、新たな大都市制度への移行に関する住民投票が二度行われたが、いずれも市民の信任が得られなかった。したがって、大阪市の行政機構は従来のシステムのままである。

地方分権の取組について、こちらではどのように取り組んでこられたのか。

○オブライエン議長 こちらでは住民投票は行っていない。もし住民投票が行われていたら、住民の信任が得られたかどうかはわからない。しかし、合同行政機構という新たな大都市制度に移行して、この制度は価値があるものであることを住民に示

してきた。そのためグレーター・マンチェスターに対する支持は高まってきている。例えば、交通システム、外部からの投資を促進することによる雇用の増加、テクノロジーや教育の向上、これは私の専門分野であるが、こういった政策が、ゆっくりだけれども地方分権が住民にとっていいものなのだとすることを示してきている。このアプローチの基本にあるのは、どんな中央政府になろうとも地方政府がやりたいこと、住民が求めていることをやっていくことである。健康的なよりよい生活、住居、経済成長、雇用など、我々地方政府はこれらを実践できるということをアピールしている。

- 杉村 同様のイギリスの大都市制度の形で言えば、ロンドンがある。首都のロンドンという巨大なまちがあり、それが広がってグレーター・ロンドンになったのだと思う。グレーター・マンチェスターも同じような経緯でできたものなのか。
- オブライエン議長 グレーター・ロンドンとグレーター・マンチェスターとは類似点はあるが、相違点の方が多い。相違点は、グレーター・マンチェスターの方がまとまっており、市長と10の区が協力してやっていく体制となっている。グレーター・ロンドンは、市長と32の区で構成されているが、32の区の間がグレーター・マンチェスターに比べて緩やかである。グレーター・マンチェスターの方が各区の協力体制が整っており、どの区も同じ立場でやっていこうという認識を持っている。
- マリア国際部長 市長も10の区の議長も同じ理事会のメンバーである。全会一致で物事を進めることとしている。
- オブライエン議長 これは重要であるが、10の区には類似点もあるが、それぞれのニーズが違う、施策の優先順位も違う。一緒になってできることとそうでないことがある。交通とか経済の一部は一緒に行うことができるが、それぞれの区に違いがあるので、みんなが平等ということは非常に重要である。

我々に共通する部分はどこなのか、我々はどこでつながっているのか、しかし、それぞれの違いはどこなのか。例えば、投資の優先順位が違うことについて、我々はかなりの時間を費やして話をするが、みんな違いがあることをプラスにとらえて建設的に議論をする。しかし、そこまでいくには年月を要した。各区の関係は、現在は成熟した関係、大人同士の関係になっている。大人同士の話ができる。こうなるまでには時間がかかった。

- 杉村 各区それぞれ事情があり、建設的な議論は難しいと思うが、それを可能にする共通のものは何なのか。私たち日本人がイギリスの方を見ていて思うのは、年齢、性別にかかわらず、サッカーを楽しんでいる印象がある。イギリスの方々が共通してコミュニケーションを取れるものとしてのサッカーとは何なのか。イギリスの方にとってサッカーとは、教育であったり、もめごとが発生したときにも同じ方向を向いて進むものであったり、人生であったり、様々なものが凝縮されたものなので

はないか。日本人にはそういうものがない。みんなが同じ方向を向いて熱中できるものがない。イギリス人にとってのサッカーはどのようなものなのか。

- オブライエン議長 イギリス人にとってサッカーはみんなを一つにまとめるものと言える。しかし、ライバル意識を生じさせるものでもある。特にマンチェスターで考えると、マンチェスター・ユナイテッドとマンチェスター・シティのどちらを応援するのかでライバル意識が生ずる。私はどちらも応援していない。私の父、兄弟はマンチェスター・ユナイテッド、でも叔父はマンチェスター・シティを応援している。でも、そのライバル意識はフレンドリーなもので、ライバル関係にはあるけれども、仲良くやっぺいこうという感じである。サッカーはみんなが注目するものなので、社会的に重要なものである。

サッカー場やサッカーを習うことに投資する必要がある。子供たちの健康、活動、チーム精神(チームの一員としてそれぞれが役割を果たすこと)を学ぶ機会になる。学校ごとにサッカーチームがあり、近隣の学校と競い合うことになるが、チーム精神をもって競い合うことは若い人たちの育成に必要なので、こうしたことにお金をかけている。

- マリア国際部長 6月に東京に行ったときにマンチェスター・シティと一緒にいった。東京では、マンチェスター・シティと何か一緒にやらないかという話があったが、マンチェスター・シティは、既に日本に横浜Fマリノスというサッカーチームを持っているので、ご希望に添えなかった。大阪にもサッカーチームがある。ベリーのサッカーチームと大阪のサッカーチームと一緒に何かするのはどうだろうか。
- 杉村 大阪には二つのサッカーチーム、ガンバ大阪とセレッソ大阪がある。大阪市内を本拠地とするのはセレッソ大阪である。面白い提案だと思う。

- オブライエン議長 素晴らしい。その他にも両市の関係構築のために何かやってみたいことがあればアイデアを伺いたい。

- マリア国際部長 昨日、今日とマンチェスターでお話をお聞きになって、杉村議長はどの分野で協力し合うのがいいとお考えか。明日、姉妹都市提携の調印式が行われ、今後ビジネスの領域での連携、教育分野での連携、大学の連携などが行われるものと思われるが、マンチェスターと大阪がお互いに学び合う、大阪がマンチェスターから学びたい、マンチェスターは大阪からこういうことを学んだらいい分野について思い当たるものはあるか。

- 杉村 あくまでも私個人の意見であるが、マンチェスターのまちを歩いて、マンチェスターの歴史、まち並み、建物に深い感銘を受けた。音楽、芸術、そしてサッカーもそうである。歴史や伝統の重み、時代が変わってもその重要性が変わらない普遍のもの、文化や芸術、音楽でもビートルズやオアシスなど様々なアーティストがいるが、日本には世界レベルのアーティストが育たないので、そのあたりをイギリスから学びたい、もっと学ぶべきだと思う。

一方、マンチェスターが大阪から学ばれたらいいと思うのは、先進医療の技術など、経済分野では先進的な技術を持つ会社があるので、そのあたりかなと考えている。

○オブライエン議長 文化はイギリス全体での輸出部門の核となるものである。マンチェスターは、それに加かなり貢献している。最近、マンチェスター出身のオアシスが再び活動を始めたが、先日のオアシスのコンサートは私の家のすぐそばで行われ、会場に行かなくてもコンサートに参加する感覚を味わえた。

我々は、音楽、文化の新しい才能（タレント）を花咲かせたいと考え、そういうリソースに投資をしている。オーケストラとかオペラ、日本が舞台となっている「マダムバタフライ」なども演じられている。また、ハレ管弦楽団、これは世界的に有名なオーケストラであるが、そういったものも見られる。ポップミュージックや映画も。

日本の「SHOGUN（将軍）」を見ている人がイギリスには多い。私も映画を見る前に歴史の勉強をして、昔学んだ「徳川」を思い出した。今イギリスでは日本の文化への関心が高い。だから「大阪」を売り込む余地はあると思う。「コミコン」（コミックブックやサイエンス・フィクションを集めたイベント）がベリーで二度開催された。コミックブック、漫画で、ドラゴンボールと言えだれでも知っている。日本のアニメ、ポケモンもとても人気がある。もっと大規模なフェスティバルを開催したいと思っている。我々は、コラボレーションに対してオープンである。

○杉村 フェスティバル開催の際には、我々もサポートしたい。

○オブライエン議長 アイデアを出し合いましょう。



記念品の交換



正面玄関で

## 駐英国日本国特命全権大使との意見交換

9月4日午後0時30分、鈴木浩駐英国日本国特命全権大使との意見交換を行った。

### 【鈴木浩駐英国日本国特命全権大使との意見交換の概要】

- 杉村 イギリスでの2025大阪・関西万博の知名度はどうか。
- 鈴木大使 イギリス各地から万博に代表団を派遣してくれている。イギリスは国を挙げて万博を応援してくれている。私はできる限り、そういう方々が日本に行く前にお会いして、単なる日本訪問だけで終わらせないでくださいと申し上げている。その時に引き合いに出すのが1970年の万博の時に、当時のチャールズ皇太子殿下が日本を訪問された。それがきっかけになってウェールズにソニーの工場が建設され、昨年その工場が50周年を迎えた。それは一例であるが、万博を通じてできたコネクションが数か月とか数年たってビジネスチャンスにつながり、その関係が長く続くようにとお話しをしている。



意見交換の様子

- 横山市長 先ほどのビジネスミッションでもこちらの企業が大阪に拠点を設けていただけるというお話をお伺いした。いろんな企業が相互に交流し、大阪の中小企業にもこちらのいろんな企業との交流をしてもらいたい。
- 鈴木大使 中小企業は海外に進出してやっていけるのかという不安がある。中小企業にとって海外進出はなかなか敷居が高い。「言葉」という高い壁があるが、今はデジタルの時代で、AIの発達によって乗り越えやすくなってきている。我々もバックアップしていきたい。
- 杉村 先ほど、ベリー区議会のオブライエン議長にお会いした。今回の姉妹都市提携をきっかけに関係を深めていきたいとおっしゃっていたが、日本のコミックなどに強い関心を示しておられ、ベリーではアニメやコスプレのイベントが開催されて

いるとのことであった。

- 鈴木大使 日本のアニメやゲームは、ヨーロッパではものすごい影響力がある。20年～30年前はアニメをサブカルチャーと呼んでいたが、当時の20代・30代が親の世代になって、彼らの子供たちも日本のアニメを見てアニメ文化に親しみ、堂々とコスプレを楽しんでいる。

日本はアニメなどをもっと活用しないといけない。サブカルチャーと言っている間は活用できていない。アニメはもはやサブではない。日本が誇る世界に冠たる文化である。アニメを見ていると、自然に日本食が出てくる。例えば、オバケのQ太郎では、小池さんがいつもラーメンを食べている。世界中の子供たちは、アニメの中でラーメンという日本の食べ物を見ている。日本酒や和食、典型的な和食ではお寿司とか和牛などの普及活動は一生懸命やっているが、ラーメンを世界に広めようとはなっていない。潜在的な可能性としては、アニメなどでのシーンに入っているものはヒットする可能性がある。外国人で日本のラーメンファンだと言う人は結構いる。

- 杉村 大阪ではここ10数年大都市制度の在り方についてずっと議論してきた。大都市制度としてのグレーター・マンチェスター合同行政機構はどうとらえればいいのか。

- 鈴木大使 イギリスはロンドン一極集中で、東京一極集中の日本と同じである。マンチェスターは産業革命が発祥した土地であるが、綿織物業が下火になり、まち自体が栄枯盛衰を経験している。そうした状況で、どうやってマンチェスターをもう一度盛り上げていこうかということで、マンチェスターは一つの市であったが、周りの行政区と一緒にになってグレーター・マンチェスター合同行政機構を設立した。行政単位を大きくすることによって、中央政府から獲得する都市交通や住宅を整備するための予算が大きくなり、バーナム市長が就任されてから行われた施策が成功している。合併することによって中央政府からの予算が増え、都市交通や都市計画に関する権限などの行政の裁量も大きくなる。イメージで言うと、大阪市に堺市や吹田市や豊中市など周辺の市を入れたような感じである。

人口で言えば、グレーター・マンチェスター全体で大体大阪市と同じくらいになる。マンチェスター市が周辺の小さな市を巻き込んで広域のシナジー効果、一体感を出すことによって投資を呼び込んでいる。例えば都市交通では、トラムやバス、黄色いバスを見かけると思うが、これはバーナム市長が取り入れたバスである。都市交通網を整備することによって、都市の交通渋滞などの問題を解決し、これが市長の業績として評価されている。

イギリスは、日本から見ると一つの国であるが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドに分かれている。イングランドも北と南があって、南はもちろんロンドンが中心で、誰もがロンドンがイングランドの中心だと思ってい

るが、一方で、マンチェスターはそれに対して気持ちの上で対抗している。マンチェスターの人は、東京に対する大阪と似ていて、ロンドンに負けるものかという気概を持っている。

グレーター・マンチェスター合同行政機構は、日本でイメージするなら広域連合に近い。構成する自治体はそれぞれの自治体としての機能を残しつつ、それぞれで合意が取れ、かつグレーター・マンチェスター合同行政機構と国との間で合意できた事項について権限を移して、都市交通や教育などの施策を行っている。

財源は構成自治体からのものと国からの補助金である。歴史的な背景があって、かつてグレーター・マンチェスターは二層式の行政形態で、現在の日本に近い形であった。10区の上に旧グレーター・マンチェスターというべきものがあったので、現在のグレーター・マンチェスター合同行政機構の形になっても以前の形に戻ったということで、新たに財源を移譲するという感じではない。旧グレーター・マンチェスターは、政治的な問題があって構成自治体の関係がうまくいかなかった。

バーナム市長の指導力は、工事中のビルのクレーンの多さからも感じられる。ロンドンにも工事中のビルはあるが、数が全然違う。経済成長の数値で見てもマンチェスターの方がロンドンより高い数値を示している。マンチェスターはまだまだ成長するだろう。

- 櫻木大阪公立大学学長 「原子物理学の父」と言われる、偉大な物理学者であるアーネスト・ラザフォードが研究していたのがマンチェスターである。
- 鈴木大使 イギリスは、原子核を発見したラザフォードをはじめノーベル賞級の研究者を多く輩出している。ケンブリッジに行くと、ジェームズ・ワトソンとフランシス・クリックがここでDNAの二重らせん構造を思いついたというパブが今も残っている。また、ニュートンが万有引力を発見したのはあのリンゴの木だと言われるものがある。真偽のほどは定かではないが、その大学でニュートンが学生たちに教えていたので、大学のどこかで万有引力をひらめいたのは間違いないだろう。イギリスは、学術研究を先導してきた国である。
- 横山市長 鈴木大使にも是非万博に来ていただきたい。
- 鈴木大使 私は残念ながら、万博には行けそうにない。イギリスを離れるためには、仕事でも休暇でも外務大臣の許可がいる。大使という職は、天皇陛下に信任状をいただいて、日本政府を代表することになり、その国にすることが仕事なので簡単には日本に戻れない。開幕の日に私の家族が万博に行ったが、大阪ヘルスケアパビリオンは良かった、未来の自分に会えるのが良かったと言っていた。



意見交換の様子

## マンチェスター・メトロポリタン大学視察

### スポーツ研究所と燃料電池研究センターの視察

9月4日午後2時、マンチェスター・メトロポリタン大学内にあるスポーツ研究所と燃料電池研究センターを視察した。



学長の挨拶と研究概要の説明



大学関係者と

スポーツ研究所では、大企業やスポーツチームと連携したパフォーマンス向上に関する研究や、健康寿命延伸等に関する研究について説明を受けた。

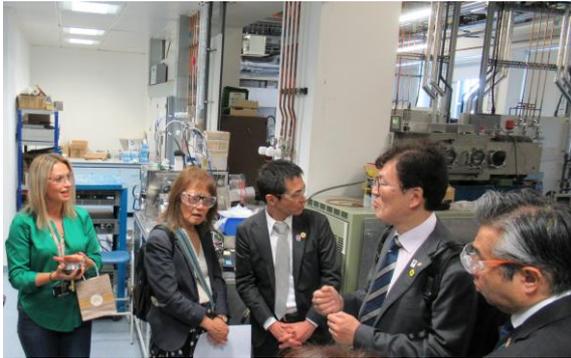


意見交換の様子



スポーツ研究所長による説明

燃料電池研究センターでは、脱炭素化に向けて重要となる燃料電池の一般家庭での実用化に向けた研究について説明を受けた。



スタッフによる説明



燃料電池研究センター関係者と

### スタートアップ企業との意見交換

9月4日午後3時30分、日本市場への進出を希望しているスタートアップ企業11社との意見交換会に参加した。

各社とも日本市場への展開に具体的なイメージを持っており、数か月後に来阪を予定しているスタートアップ企業も複数あった。両市の支援機関と連携し、スタートアップ企業による交流を進めていくことなどが確認された。



スタートアップ企業との意見交換



スタートアップ企業の皆さんと

## 在マンチェスター日本国名誉領事との意見交換

9月4日午後6時、ジョー・アーメド在マンチェスター日本国名誉領事(Jo Ahmed)主催の夕食会に参加し、政府・行政関係者や大学関係者、現地企業等と親睦を深めるとともに、経済・文化交流、学術研究にかかわる意見交換を行った。



主催者挨拶をするアーメド名誉領事



意見交換の様子